



「バベルの塔」

キリスト教センター長 藤倉哲哉

みなさんは旧約聖書の「バベルの塔」の物語を知っているでしょうか。世界の成り立ちについて記した創世記にある人間が天に届くほど高く建設しようとした塔のことです（創世記 11:1~）。

1 世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2 東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3 彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。4 彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしましょう」と言った。5 主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、6 言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

一般には、思い上がった人間が神への挑戦として高い塔を建てようとしたので、このような人間の企てを打ち砕くために神は人間の言葉をバラバラに乱したとされ、世界でさまざまに言語が異なることの理由を示していると言われています。学生のみなさんのなかには、いまの自分たちが外国語を学ぶために苦労するのはこのためだったのかと残念に思う人があるかも…。

ここで、塔を建てようとした人間は「塔の頂きを天に届かせ名を上げて散らされるのを免れよう」と言っています。「頂きを天に」というのは「最も大きなものに」、「名を上げ」は「有名で高みに」と置き換えて、より大きくもっと強くなって上に立とう…という記述が、旧約聖書の時代に後の世の覇権争いを予想していたものとしたら、私たちは聖書の教えに真剣に耳を傾ける必要があります。

一方で「ひとつの民でひとつの言葉を話すからこのようなことを始めた」というのは、言語の問題だけを指摘するものではないかも知れません。「ひとつの民」が「ひとつの言語」を話すのであればコミュニケーションに支障がないので、むしろ物事は円滑に進むはずで、ひとつの目標を達成する際にはむしろ団結や協力が必要なはずで。

しかし、私にはバベルの塔の物語の「ひとつの言葉」が示唆するところが「プロパガンダに気を付けろ！」と、みんながひとつの考えに偏る、独善に陥ることを戒めているように思えて仕方ありません。大きく強く向上・進歩することは確かに大切ですが「より大きくもっと強くいつまでも」となるとどうでしょう。ことに国家のトップや経営者・リーダー・指導者などにはまさにこの「言葉」をよく読んで考えて欲しいものです。

右：バベルの塔→



ひとくちメモ 「聖書からの…」

バベルの塔、バビル2世、トーキョーバベルなど「バベルの塔」に関連付けられた漫画やアニメが数多く世に出ています。「七つの大罪」、「新世紀エヴァンゲリオン」、「聖闘士星矢」などもキャラクターの名や背景、ストーリーの設定に聖書がヒントとなっているようです。

一方で、聖書の物語そのものを描いたシリーズ「アニメ親子劇場」や海外から制作依頼があった「手塚治虫の旧約聖書物語」などは、残念ながら日本ではあまり知られていません。

“Evangelion”が「よい知らせ」＝「福音」は聞いたことがあるという人もいるでしょうか。「使徒」＝「遣わされたもの」はイエスの弟子たちやキリスト教の伝道に貢献した者を指しています。

もちろん、トマスやマタイ、ヨハネやアンデレなど聖書の「使徒」たちは、「第3新東京市」の襲撃とは関係がないので念ため。

(上のタイトルのバナーは「最後の晩餐」：イエスと12人の弟子たち)

ウクライナのための祈り

正義と平和の神よ、
わたしたちは今日、ウクライナの人々のために祈ります。
またわたしたちは平和のために、そして武器が置かれますよう祈ります。
明日を恐れるすべての人々に、
あなたの慰めの霊が寄り添ってくださいますように。
平和や戦争を支配する力を持つ人々が、知恵と見識と思いやりによって、
み旨に適う決断へと導かれますように。
そして何よりも、危険にさらされ、恐怖の中にいるあなたの大切な子ども
たちのために、
あなたがウクライナの人々を抱き守ってくださいますように。
平和の君、主イエス・キリストによってお願いいたします。
アーメン。

ジャスティン・ウェルビー大主教
スティーブン・コットレル大主教

